



学校法人
鎌倉女子大学

ある個人的な見解 — 「戦後70年談話」を聴いて

さまざまな検討と推敲^{すいこう}を経てまとめられた、思慮と展望を内に秘めた談話であったと思います。私は、日本の政治家の演説を聴いて初めて感動というものを覚えました。

キャロライン・ケネディー駐日アメリカ大使は、「非の打ち所がない内容で素晴らしい」と評価したそうです。アメリカ国防大学国家戦略研究所のジェームズ・プリシュタップ上級研究員は、「品格と威厳があり、適切な言葉を使いながら、あらゆる側面に触れた大変印象深い談話だ」と論評したそうです。

台湾、フィリピン、インドネシア、東南アジア、豪州^{おほしゅう}の各政府筋からも、概ね好意的に受け取られたようです。

中国政府も韓国政府も、言い出せばいろいろさまざま不満や要求はあるのですが、総じて抑制的に受け止めてくれているようで、この談話を契機に関係がよりよい方向に進むことを願うばかりです。

談話の内容を聴く前から、総理がどう言ったとしても批判しようと身構えていた人士も、結局談話の内容に踏み込んだ批判は出来ませんでした。「この談話は出す必要がなかった。いや、出すべきではなかった」、「侵略の主体が日本なのか、国際社会一般のことなのか主語がぼかされている」、「『侵略』や『おわび』が首相本人の言葉として語られていない」、「これが安倍晋三首相の『認識』だとすると一面的すぎる。歴史的普遍性に堪えられる『談話』になっていない」といったような、言わば外枠の議論に終始しました。それだけこの談話の内容は、周到に準備されたものでしたし、内容に関わる軽率な批判は、却って批判者の認識と見識^{けんしき}を曝け出してしまうことをさすがに察知したからでしょう。そもそも、これらの言辭は、批判することに急なあまり、少なくとも私には、真面目に国際関係をよりよい方向に差し向けていこうといった問題意識は感じられませんでした。

今回の談話は、19世紀後半以降の世界史の流れ、日本がその潮流を見失い孤立し脅威となっていく過程、その歯止めたり得なかった国内の政治システムの欠陥、戦時下の行為、その結果としての彼我の惨害と敗戦、追悼と反省、関係諸国の寛容と支援に基づく国際社会への復帰、平和への努力、未来への貢献等々、一つ一つ落ち着いて考えてみなければならない、また細かく論じてみたい事柄がたくさん含まれているわけですが、ここで全てにわたって話題に出来るはずもありませんので、特に若い世代の人たちが直接話題になった部分にごく限定して、少しお話してみたいと思います。

私が注目したのは、やはり次のくだりでした。「日本では、戦後生まれの世代が、今や、人口の八割を超えています。あの戦争には何ら関わりのない、私たちの子や孫、そしてその先の世代の子どもたちに、謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません。しかし、それ

でもなお、私たち日本人は、世代を超えて、過去の歴史に真正面から向き合わなければなりません」。

このくだりは、ドイツ敗戦40年を記念して、当時の西ドイツ連邦大統領のワイツゼッカー氏が連邦議会で行なった演説『荒れ野の40年』の次のくだりを思い起こさせます。

「今日の人口の大部分はあの当時子供だったか、まだ生まれてもいませんでした。この人たちは自分が手を下してはいない行為に対して自らの罪を告白することはできません。ドイツ人であるというだけの理由で、彼らが悔い改める時に着る荒布の質素な服を身にまとおうのを期待することは、感情をもった人間にできることではありません。しかしながら先人は彼らに容易ならざる遺産を残したのであります。罪の有無、老幼いずれを問わず、われわれ全員が過去を引き受けねばなりません。 —中略— 問題は過去を克服することではありません。さようなことができるわけではありません。しかし過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります」。特に最後のセンテンスは、印象的な言葉だけに大変有名になりました。ただ、それだけに、そこだけが抽出されて独り歩きし、さまざま誤解がつきまとはおりますが。

それは兎も角、この演説もまた周到に準備された文章でした。評論家の見解ではなく、何とんでも大統領の演説文ですから、これを契機に惹き起こされるかも知れない周辺諸国との新たな葛藤や国内世論の新たな不満を避けるために慎重に配慮を施したことでしょう。ですから、氏は、その前段で、こうもはっきりと言い切っているのです。「一民族全体に罪がある、もしくは無実である、というようなことはありません。罪といい無実といい、集団的ではなく個人的なものであります」と。そこには、罪の主体を国家の問題としてではなく、個人の問題として論じ切ろう、またそもそも罪の問題は個人を主語としてしか論じ得ない、それにも拘わらずそれぞれに自分の果たすべき責任を引き受けようという、如何にも西洋人らしい氏の断固とした主張と、政治家として国家国民を護ろうとする静かな決意が込められてもいたわけです。もっとも、こうした発言がリアリティーをもって人々に理解されていった背景には、特にブランド首相を初めとする、長年にわたる東欧諸国との和解の努力があったこともまた見逃してはならないことでありましょう。

この『荒れ野の40年』が発表された1985年当時、私は、ドイツが敗戦した直後の1945年から6年にかけての冬学期、ハイデルベルク大学で当代を代表する哲学者であったカール・ヤスパースが行なった記念碑的講義との思想的近似性を感じたものです。実際、彼もまた、こういつていたからです。「全一民族としての民族に罪があるとか、ないとかいうことはあるはずがない。民族を一個の範疇と見て範疇的判断を下すのは、どんな場合にも不公正なことである。そういうことを為し得るのは常に民族に属する個人のみである」と。

この講義録は、後日出版され、日本でも橋本文夫氏によって『責罪論』という名で翻訳されておりましたので、『荒れ野の40年』の訳者である永井清彦氏に、たまたま私がかつてお世話になった大学で一緒の時期があったものですから、その近似性をお聞きしたこと

がありましたが、氏は、そのことはお認めになりませんでした。ただ、昨年、講演のため京都に出向いた折、外務省の元欧亜局長で、現在京都産業大学世界問題研究所長の東郷和彦氏から「ワイツゼッカー演説の思想的根拠はヤスパースです」という見解を聞かされ、久しぶりにそのことを思い出した次第です。それは、後日氏が送って下さった『歴史認識を問い直す 一靖国、慰安婦、領土問題』（角川書店）でも指摘されていることです。

この『責罪論』は、実は私も縁のある本で、評論家の加藤典洋氏の提案で、1998年、平凡社ライブラリーに『戦争の罪を問う』という表題であらためて加えられることになった時、依頼されて、橋本文夫訳の補訂と本書の解題を書かされたことがありました。ヤスパースは、東郷氏のいうように、「敗戦後のドイツで、ドイツの戦争に対して正面から思索した最初のドイツ人といってよい」でしょう。その詳しい内容について語る余裕はここではありませんが、ただはっきりしていることは、ヤスパースの主張は一億総懺悔的な責任論を展開したもので、さまざまな罪を「罪」とひと括りにして弾劾したものでなく、当時始まりつつあったニュールンベルク裁判を通じてのドイツ及びドイツ国民の罪の問われ方を想定しながら、「刑法上の罪」、「政治上の罪」、「道徳上の罪」、「形而上的な罪」と、それぞれ異なる罪の種類とそれぞれの罪に応じた応答の仕方について冷静に分析しようとしたものでした。そうすることによって、人が応えるべき事柄から目を背け、それを糊塗することを赦さず、そうかといって人が不当な批判と断罪に晒されることを赦さず、それぞれにそれぞれに応じた罪と責任の在り処を問いかけさせ、引き受けさせようと試みたものでした。それを縋い交ぜにすると、「罪はさらに転じて政治の手段となる」と。

さて、話を戻すと、私は、安倍氏の心情と配慮はむしろ文章として発表された談話の最後に語られた生のコメントによく表れていたように思いました。冒頭、総理は、こう話しました。「談話の作成にあたっては、『21世紀構想懇談会』を開いて、有識者の皆さまに率直且つ徹底的なご議論をいただきました。それぞれの視座や考え方は、当然ながら異なります。しかし、そうした有識者の皆さんが熱のこもった議論を積み重ねた結果、一定の認識を共有できた。私は、この提言を歴史の声として受け止めたいと思います。そして、この提言の上に立って、歴史から教訓を汲み取り、今後の目指すべき道を展望したいと思えます」。

民主化された時代、多様性の時代であるのですから、どのような意見があっても構わないわけですが、しかし日本国民が歩んできた道の大筋については、サンフランシスコ講和条約時の「全面講和か、単独講和か」以来、大きな問題に突き当たると決まってその都度国論を二分して争う状態をいつまでも続けるのではなく、歴史の事実を踏まえながら歴史の理解について国民が共有出来る一定のコンセンサスを作っていくという強い使命感がにじみ出ていたように感じました。私が冒頭「思慮と展望を内に秘めた談話」といった一端は、このことでもあります。

また、総理は、最後にこう締め括りました。「私たちは、歴史に対して謙虚でなければなりません。謙虚な姿勢とは、果たして聞きもらした声が他にもあるのではないかと、常に

歴史を見つめ続ける態度であると考えます」。

「歴史とは現在と過去の対話である」といったのは、イギリスの歴史家E・H・カーでした。「全ての歴史は勝れて現代史である」といったのは、イタリアの歴史家ベネデット・クローチェでした。共に20世紀を代表する歴史家です。この言葉は、歴史が現代に生きる人々の利害から修正される主観的な構築物であるといった意味ではなく、これまで見過ごされてきた事柄や見方にもその都度光が当てられ、それによって歴史の事実がより客観的に彫琢されていくといった趣旨で語られた言葉です。むしろ、若い世代の人たちに託されているのは、歴史を一定の角度から一言で切り取って、これが普遍だと断じ切ってしまうのではなく、その都度その都度歴史と向き合いながら、自らの目で起こった出来事を確かめながら、未来を創造する知恵を紡ぎ出す努力でありましょう。むしろ、そこにこそ、過去に目を閉ざすことのない者にして果たし得る、未来への責任というものがあるように思います。

[>前のページへ戻る](#)